
 原 著

臨地実習での学習内容に対する学生自己評価の変化 — 成人看護学臨地実習で興味・関心のあるテーマを課題学習に 導入した場合と導入しなかった場合の比較から —

桑 村 由 美, 市 原 多 香 子, 南 川 貴 子,
田 村 綾 子, 森 本 忠 興, 近 藤 裕 子

徳島大学医学部保健学科看護学専攻

要 旨 臨地実習での学びを効果的にするために、3年課程3年次学生を対象に臨地実習固有の学習内容を用いた学生自己評価を継続しているが、自己評価得点は、実習開始前から中期にかけて上昇しても、中期から終了時には上昇しない傾向が続いた。そのため、成人看護学臨地実習（急性期）では、2003年度後期に学生の興味・関心のあるテーマを課題学習として導入することを試みた。課題学習を導入した2003年度後期（36人）と導入しなかった2001年度後期（34人）の自己評価得点の差を統計的に検定することにより、課題学習の効果を検討した。その結果、以下の結果が得られた。

- ① 課題学習のテーマを決定する過程において、学生は、自己の学習状況を振り返り、整理することができた。
- ② 終了時の自己評価では、課題学習を導入しなかった2001年度では4.0点以上の高得点の項目が20項目であったのに対し、課題学習を導入した2003年度では40項目もあり、学生は学習内容に到達したと高く評価していた。

これらのことより、興味・関心のあるテーマを課題学習として導入することは、学生の自発性を高め、学習内容に対する学生の到達度の認識を高める可能性があると考えられた。

キーワード：臨地実習，学生自己評価，興味・関心，課題学習

はじめに

看護基礎教育において、臨地実習は、既習の理論、知識と実践の統合の場である。そのため、学生の学習の到達レベルを確認しながら、効果的に臨地実習での学習が進められることが求められる。

私達は、学生の学習の到達レベルを確認する方法のひとつとして、臨地実習固有の学習内容¹⁾を用いて、自己評価を行っている。その結果、数年前より、実習の中間の時期における自己評価得点が頭打ちとなる傾向がみら

れた²⁾。この原因として、臨地実習の中で、学生が人間関係を結ぶコミュニケーション技術や看護技術が未熟であるために、患者を深く理解することができないことが考えられた²⁾。臨地実習の学習過程においては、学生の主体的な学習姿勢が学習効果に大きく影響する。一般に、学習への動機付けが高いと学習行動が強まり、質的にも量的にも高い学習が行われる³⁾。そのため、学生の主体的で自発的な関心を学習への原動力として動機付けることにより、より効果的な学習が展開できるのではないかと考えた。

これまで、臨地実習での学びに対する自己評価を用いた実習目標到達度に対する検討⁴⁾⁻⁷⁾は多いが、学生の興味・関心のあるテーマを導入したことによる検討はみあたらない。

2004年11月22日受理

別刷請求先：桑村由美 〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15
徳島大学医学部保健学科看護学専攻

本研究の目的は、臨地実習での学習内容に対する自己評価が、学生の興味・関心のあるテーマを課題学習に導入した場合と導入しなかった場合に差があるかどうかを成人看護学臨地実習（急性期）において、検討することである。

方 法

1. 調査対象と調査時期

2001年度および2003年度3年課程短大3年次学生に、臨地実習（全24週間）オリエンテーション時の4月（以下、開始前）、前半が終了する7月（以下、中期）、終了時の12月（以下、終了時）に質問紙調査を行った（図1）。調査協力の得られた中で本研究の分析対象としたのは、2001年度、2003年度の後期に成人看護学臨地実習（急性期）を体験した学生である（表1）。各年度の実習体験時期（10月、11月、12月）ごとに、開始前・中期・終



図1 3年次臨地実習ローテーション表の中での成人看護学臨地実習（急性期）の位置づけおよび調査時期

了時の自己評価得点を照らし合わせて比較検討した。課題学習を導入したグループは、後期に成人看護学臨地実習（急性期）を体験した2003年度の3グループである。

2. 質問紙の内容

質問紙は国立大学医療技術短期大学部看護学科協議会臨地実習委員会Aグループで提言された臨地実習固有の学習内容¹⁾を用いた。その内容は、人間関係の成立、看護実践の価値認識、知識・技術・態度の統合、専門職業人としての姿勢・態度に関する62項目から構成されたものである。回答は「とてもよくできる（5点）」から「全くできない（1点）」、あるいは「とてもそう思う（5点）」から「全く思わない（1点）」の5段階尺度で学生が自己評価を行った。

3. 3年次に展開される臨地実習全体の位置づけ

ここでは、臨地実習とは各領域で展開される臨地実習の総称として用いる。1・2年次にすべての科目の講義と基礎看護学実習を履修した後、3年次に24週間の臨地実習をローテーションで展開している（図1）。78～80人の学生が、1グループ13～14人、全6グループにわかれている。

臨地実習の単位数は、成人看護学臨地実習14単位（急性期・慢性期・リハビリ・精神）、小児看護学臨地実習3単位、母性看護学臨地実習3単位の合計20単位である。

4. 成人看護学臨地実習（急性期）の位置づけ

単位数は3単位で、135時間の臨地実習を3週間にわたって、大学附属病院の消化器外科および胸部外科の2病棟で2グループに分かれて、それぞれの病棟に固定して実習を行っている。担当教員は、単位認定教員1人と実習助手1人である。

実習目的は、以下の2項目である。①成人の受け持ち患者を通して、急性期（手術を受ける）患者のおかれた状況の体験とその反応の大切さを理解し、

表1 成人看護学臨地実習（急性期）を体験した時期別にみた研究承諾の得られた対象者数の内訳

成人看護学臨地実習（急性期）を体験した時期			10月			11月			12月		
			開始前	中期	終了時	開始前	中期	終了時	開始前	中期	終了時
実習年度	2001年度	対象者数（人）	12	13	13	13	11	10	12	7	11
		（回答率）	(85.7%)	(92.9%)	(92.9%)	(92.9%)	(78.6%)	(71.4%)	(92.3%)	(53.8%)	(84.6%)
2003年度	対象者数（人）	10	2	11	11	7	13	13	5	12	
	（回答率）	(76.9%)	(15.4%)	(84.6%)	(84.6%)	(53.8%)	(100%)	(100%)	(38.5%)	(92.3%)	

状況にあった看護ケアができる能力を養う。②成人の受け持ち患者を通して、急性期（手術を受ける）患者の看護について、アセスメント、計画立案、実施、評価できる能力を養う。

実習目標は、以下の2項目である。①成人の全身麻酔下で、開胸・開腹術を行う患者に対して、適切な看護を計画し、実施するために必要な基礎的能力を習得する。

②成人の手術療法を受ける患者を通して、患者—看護師間の基本的人間関係の在り方を習得する。

5. 課題学習

前述の実習目的・目標を達成するための学習方法のひとつとして位置づけた。これまでの調査で、臨地実習固有の学習内容¹⁾に対する自己評価は、開始前から中期には上昇するが、中期から終了時には上昇しない傾向にあることが明らかになった²⁾。そのため、実習目的や目標の到達に向けて、教育方法の改善が必要であると考え、2003年度は、中期から終了時に至る実習後期に、課題学習を課すことを試みた。

課題学習のテーマは、急性状況にある患者に実施する看護ケアの中から、さらに、興味・関心を抱いたテーマを学生が自由に決定できるようにした。課題決定に際しては、学習の進行状況や病棟での実情を踏まえて、必要時には教員と相談を行った。その際、成人看護学臨地実習（急性期）での目的・目標と照らし合わせながら、実習開始時に受け持った患者の看護を体験する中で学んだ学習内容の確認を行った。

実習期間を通じて、できるだけ学生の自主性が尊重され、自ら学びを展開しようとする意欲が優先されるように配慮した。テーマの決定は、実習開始後、2週間が経過するまでに行い、3週間の病棟実習期間内に、実践し評価できることを目標とした。

6. 分析方法

1) 学生が報告した課題学習のテーマ内容の分析

課題学習のテーマの分析については、学生が決定した内容を実習開始時に受け持った患者の手術に伴う経過や学習内容と照らし合わせながら文章化した。そして、Berelson, Bの内容分析の手法を参考にして、質的帰納的分類を行った。具体的には、学生が決定した内容について意味内容の類似したものを集めて分類し、その分類が表す内容をカテゴリーのネームとしてネーミングした。

2) 質問紙調査による自己評価得点の分析

開始前・中期・終了時における自己評価得点は、項目別に単純集計し、平均値と標準偏差を求めた。統計解析にはSPSS 11.5J for Windowsを用いて、以下の2つの視点から分析を行った。なお、どの検定に置いても有意水準は5%とした。また、自己評価得点の到達基準は、自己評価得点の80%にあたる4点を到達、70%以上にあたる3.5点を到達に近い状態、60%以上70%未満にあたる3.0点以上3.5点未満を到達度の低い状態、60%未満にあたる3点未満を到達度の非常に低い状態として設定した²⁾。

①実習時期（開始前、中期、終了時）に伴う自己評価得点の変化の検討

自己評価得点のそれぞれの得点の分布は、2001年度および2003年度の各年度の開始前・中期・終了時のどの時期においても、極端に正規分布から偏っていた。そのため、ノンパラメトリック検定法のクラスカル・ウォリス検定を用いて、実習時期の経過に伴う自己評価得点の変化の差を明らかにするために、独立した3群の差の検定を行った。その結果、有意差がある場合に多重比較検定を行い、どの実習時期に自己評価得点に差があるかを各年度ごとに検討した。

②課題学習を課した2003年度と課さなかった2001年度での自己評価得点の母平均の差の検定

各年度の各時期における自己評価得点の母平均の比較として、独立したサンプルのt検定を行った。このとき、後期に成人看護学臨地実習（急性期）を体験した中でも、実習を行った時期が、10月、11月、12月のそれぞれで、影響因子が異なることが予測されるため、各年度での対応する実習時期ごとの分析を行った。

7. 倫理的配慮

学生には、研究の趣旨、成績評価には無関係であること、研究への参加は自由意志であり、参加を承諾後にも拒否することがいつでも可能であること、データは統計的に処理し、個人のプライバシーを守ることを口頭および文書で説明し、同意の得られた者のみを本研究の対象とした。

結 果

学生が決定した課題学習のテーマとした内容は、対象別に、受け持ち患者の中でのケアを深める内容と、更に

表2 学生の設定した課題学習の具体的内容とその分類

課題学習の分類		具体的内容
受持患者を 対象 (12)	受け持ち患者のケアを深める内容 (12)	経腸栄養 (1) 術後の離床に関する看護 (1) 術後の疼痛時の看護 (1) 合併症 (糖尿病, 肥満, 高血圧症, 高脂血症) の看護 (1) 合併症 (循環器疾患: 心臓ペースメーカー挿入中) のある患者の看護 (1) 合併症 (脾臓切除に伴う高血糖) の管理 (1) 食事指導 (3) ドレーン管理 (2) 急性期患者管理 (1)
追加して 受け持った 2人目の 患者を 対象(24)	学習目標を補完する内容 (11)	術前看護 (2) 術前・術後の看護 (1) 術前・術後の看護, 急性期患者管理 (5) 術前・術後の看護, 急性期患者管理, MRSA 院内感染予防 (1) 術前・術後の看護, 急性期患者管理, 食事指導 (1) 術前・術後の看護, 急性期患者管理, 退院指導 (1)
	(対象を異にした) 学習内容の反復 (5)	術前・術後の看護 (1) 術前・術後の看護, 急性期患者管理 (3) 術前・術後の看護, 合併症 (片麻痺) のある患者の看護 (1)
	急性期に特徴的な技術内容 (5)	ストーマ管理 (1) ストーマ, 回腸導管の管理 (1) 胃瘻造設時の栄養管理 (1) 術前の看護, ストーマ管理 (1) 術後の看護, 急性期患者管理, ストーマ管理 (1)
	実習目標の補完と急性期に特徴的な技術内容の複合 (3)	術前・術後の看護, 退院指導, ストーマ管理 (1) 術前・術後の看護, 退院指導, 経皮経肝胆道ドレナージ中の看護 (1) ストーマ・回腸導管の管理, 術前・術後の看護 (1)

追加して新たに受け持った2人目の患者に対するケアの2つに大別できた。そして、後者はその内容から4つに分類できた(表2)。

まず、受け持ち患者を対象にした課題では、「受け持ち患者のケアを深める内容」は、受け持ち患者に実施しているケアの中で、更に患者の個別性に合わせて、ケアを深めて実施しようとする事柄であった。次に、追加して新たに受け持った2人目の患者を対象とした課題の「学習目標を補完する内容」は、受け持ち患者の手術日と受け持ち期間の関係で、術前の看護が体験できなかった場合や、受け持ち患者の術式により、集中治療室での看護が体験できなかった場合に、実習目標を補完しようとする内容であった。「(対象を異にした) 学習内容の反復」は、受け持ち患者と同じ疾患を持つ、別の患者の看護を再度体験しようとするものや、学習項目が同じであっても、対象となる患者や術式を違えて再度体験しようとするものであった。「急性期に特徴的な技術内容」では、

ストーマや胃瘻など、手術後の身体機能の変化により、患者が新しく体得すべき事柄の指導などを体験しようとする内容であった。「実習目標の補完と急性期に特徴的な技術内容の複合」は、実習目標の補完と急性期に特徴的な技術との両方を学ぼうとする内容であった。

次に実習時期(開始前, 中期, 終了時)に伴う自己評価得点の変化の検討を行った。2003年度では、中期から終了時にかけての自己評価得点の平均値は62項目全てにおいて上昇し、そのうち、11項目で、統計的な有意差が認められた(表3)。そして、5項目は終了時の段階で4.0点以上と高い自己評価であった。2001年でも、中期から終了時に統計的な有意差がでたのは、11項目あったが、4.0点以上の高い評価であったのは、3項目だけであった(表4)。さらに、12月に成人看護学臨地実習(急性期)を体験したグループの年度別の比較を行ったところ、終了時の自己評価得点が4.0点以上の高得点であったのは2003年度では、62項目中40項目あった。学生は、

表3 2003年度に中期から終了時にかけての自己評価得点が上昇した11項目

番号 ^(注)	評価項目	開始前	中期	終了時	検定結果		
		N=34	N=14	N=36	開始前と中期	開始前と終了時	中期と終了時
7	患者が苦痛に感じていることは何かを考えながら接する	3.44±0.66	3.57±0.51	4.17±0.74	N.S.	*	*
8	患者が看護者に求めていることは何かを考えながら接する	3.24±0.74	3.36±0.50	3.94±0.67	N.S.	*	*
12	言語的コミュニケーションを用いる	3.53±0.75	3.57±0.51	4.19±0.75	N.S.	*	*
13	非言語的コミュニケーションを用いる	2.97±0.72	3.07±0.62	3.72±0.70	N.S.	*	*
32	実施した看護と患者の反応を看護師(指導者)に報告する	3.26±0.71	3.71±0.61	4.22±0.68	N.S.	*	*
34	実習で体験したことを看護理論と照らして考えることができる	2.47±0.66	2.57±0.65	3.31±0.87	N.S.	*	*
35	患者に必要な看護を継続して行う	3.21±0.41	3.36±0.63	3.92±0.65	N.S.	*	*
36	学生が行った看護のうち、継続する必要がある看護は看護師に伝える	2.74±0.62	2.64±0.63	3.57±0.98	N.S.	*	*
37	看護チームにおいて、学生としての自己の役割を果たす	3.21±0.59	3.50±0.65	4.06±0.63	N.S.	*	*
48	カンファレンスでは自己の意見を述べる	3.29±0.76	3.21±0.58	3.81±0.67	N.S.	*	*
59	実習をととして自己の看護観(看護に対する考え方)を深める	3.50±0.71	3.43±0.65	4.03±0.75	N.S.	*	*

* p<0.05

番号^(注);引用文献「国立大学医療技術短期大学看護学科協議会臨地実習委員会 A グループ(森田敏子他):臨地実習固有の学習内容に関する学生の到達度評価」¹⁾の表示に基づいて番号を使用 (以下同様)

表4 2001年度に中期から終了時にかけての自己評価得点が上昇した11項目

番号	評価項目	開始前	中期	終了時	検定結果		
		N=34	N=14	N=36	開始前と中期	開始前と終了時	中期と終了時
17	文献を活用して、看護を創意、工夫する	2.55±0.71	3.12±0.81	3.26±0.56	N.S.	*	*
22	看護上の問題(看護診断)の優先度を考える	2.85±0.77	3.43±0.74	3.49±0.63	N.S.	*	*
23	看護目標を設定する	2.95±0.68	3.33±0.70	3.49±0.61	N.S.	*	*
24	看護上の問題(看護診断)に即して、解決策(看護介入)を立案する	2.80±0.72	3.39±0.65	3.54±0.63	N.S.	*	*
26	看護技術は、原理・原則に基づいて(基本的留意事項を守って)行う	3.04±0.69	3.54±0.68	3.71±0.62	N.S.	*	*
34	実習で体験したことを看護理論と照らして考えることができる	2.47±0.73	2.75±0.61	2.94±0.79	N.S.	*	*
37	看護チームにおいて、学生としての自己の役割を果たす	3.15±0.68	3.58±0.80	3.93±0.63	N.S.	*	*
38	医療チームと協調して患者への援助を行う	3.03±0.64	3.51±0.75	3.94±0.62	N.S.	*	*
39	学生(将来の医療従事者)として責任ある行動をとる	3.54±0.73	3.84±0.81	4.21±0.68	N.S.	*	*
50	グループメンバーと学習を共有する	3.47±0.76	4.03±0.97	4.28±0.73	N.S.	*	*
51	グループメンバーと励まし助けあって実習する	3.89±0.80	4.37±0.78	4.54±0.63	N.S.	*	*

* p<0.05

これらの項目について学習内容に到達したと判断していた(表5)。これに対して、2001年度は20項目と、半数以下であった(表6)。そして終了時の自己評価得点が3.0点以下と低かったのは、2001年度では「看護とは何かを考え研究的態度(文献活用・事例検討)で実習する(2.82±0.60;平均値±SD以下同)」「評価に基づき、看護計画を修正する(2.91±0.54)」であった。これらの項目

については、到達度の非常に低い状態と学生は自己評価していた。これに対して、2003年度では最も低かったのは「科学的根拠(裏付け)を調べて看護する(3.42±1.00)」であり、それ以外はすべて3.5点以上で、到達に近い状態と自己評価していた。後期に成人看護学臨地実習(急性期)を体験した学生は、実習時期が、10月、11月、12月にそれぞれわかれていたので、体験した月ごと

表5 2003年度12月に成人看護学臨地実習(急性期)を体験した学生で、終了時の自己評価得点が4.0点以上の高得点であった項目

番号	項目	平均値±SD
14	対象の発達段階に応じたコミュニケーションをはかる	4.00±0.74
16	基礎的知識を活用して看護を行う	4.00±0.60
25	看護計画に基づいて実施できる	4.00±0.60
28	患者の状態や反応に応じて、立案した解決策や優先度を修正・変更して実施する	4.00±0.74
33	対象の特殊性(発達段階・健康レベル・系統別)に応じて看護を行う	4.00±0.60
43	自己の課題を自覚し、主体的に学習する	4.00±0.74
58	実習をととして自己の死生観を深める	4.00±1.04
19	患者の健康障害・発達課題・生活への影響等について情報収集する	4.08±0.51
27	看護技術は、患者の個性(患者の状態)に応じて工夫する	4.08±0.67
29	実施した結果を評価する	4.08±0.79
30	評価に基づき、看護計画を修正する	4.08±0.79
56	実習をととして自己の人間観を深める	4.08±0.79
62	実習をととして看護師になりたいと思うようになる	4.08±0.90
8	患者が看護者に求めていることは何かを考えながら接する	4.17±0.72
10	患者も自分も成長し、変化する存在であると感じる	4.17±0.83
50	グループメンバーと学習を共有する	4.17±0.72
52	実習をととして看護する喜びを感じる	4.17±0.94
53	実習をととして患者の闘病姿勢や生きる努力に感動する	4.17±0.83
55	実習をととして看護の役割を自覚する	4.17±0.92
35	患者に必要な看護を継続して行う	4.25±0.62
42	指導者の助言やコメントを参考にしながら、自己を見直す	4.25±0.75
60	実習をととして看護のやりがいを感じる	4.25±0.75
11	看護者の立場から患者のために何が出来るかを考える	4.33±0.65
37	看護チームにおいて、学生としての自己の役割を果たす	4.33±0.65
38	医療チームと協調して患者への援助を行う	4.33±0.65
47	カンファレンスでは他者の意見を傾聴する	4.33±0.65
57	実習をととして自己の健康観を深める	4.33±0.78
5	患者の個性(その人らしさ)を尊重する	4.42±0.79
7	患者が苦痛に感じていることは何かを考えながら接する	4.42±0.67
12	言語的コミュニケーションを用いる	4.42±0.67
32	実施した看護と患者の反応を看護師(指導者)に報告する	4.42±0.51
4	患者の言動をありのままに受け止める	4.50±0.80
41	誠実な態度で患者を中心に考えて看護をする	4.50±0.67
51	グループメンバーと励まし助けあって実習する	4.50±0.67
15	患者との信頼関係を深めようとする	4.58±0.67
39	学生(将来の医療従事者)として責任ある行動をとる	4.58±0.67
1	患者に関心を持ちながら接する	4.67±0.49
2	患者の訴えや意見を傾聴する	4.67±0.49
3	患者の気持ち(情緒・感情・思い)を考える	4.67±0.49
40	礼儀正しく節度を守って実習する	4.67±0.49

表6 2001年度12月に成人看護学臨地実習(急性期)を体験した学生で、終了時の自己評価得点が4.0点以上の高得点であった項目

番号	項目	平均値±SD
3	患者の気持ち(情緒・感情・思い)を考える	4.00±0.45
41	誠実な態度で患者を中心に考えて看護をする	4.00±0.45
42	指導者の助言やコメントを参考にしながら、自己を見直す	4.00±0.45
2	患者の訴えや意見を傾聴する	4.09±0.54
12	言語的コミュニケーションを用いる	4.09±0.54
55	実習をととして看護の役割を自覚する	4.09±0.54
40	礼儀正しく節度を守って実習する	4.00±0.63
1	患者に関心を持ちながら接する	4.09±0.70
50	グループメンバーと学習を共有する	4.09±0.70
56	実習をととして自己の人間観を深める	4.09±0.70
61	実習をととして看護をさらに深めたいという気持ちや姿勢をもつ	4.09±0.70
52	実習をととして看護する喜びを感じる	4.09±0.83
47	カンファレンスでは他者の意見を傾聴する	4.18±0.40
49	グループメンバーと相互に意見交換する	4.18±0.60
53	実習をととして患者の闘病姿勢や生きる努力に感動する	4.18±0.75
60	実習をととして看護のやりがいを感じる	4.18±0.75
57	実習をととして自己の健康観を深める	4.27±0.65
62	実習をととして看護師になりたいと思うようになる	4.27±0.65
15	患者との信頼関係を深めようとする	4.36±0.67
51	グループメンバーと励まし助けあって実習する	4.36±0.67

に分類して、自己評価得点を検討し、実習年度による自己評価得点の母平均の差の検定を行った。その結果、開始前と中期では、62項目中ほとんどの項目において、有意な差は認められなかった。しかし、終了時の自己評価得点は課題学習を課した2003年度において、有意に自己評価が高い項目が多かった(表7)。実習時期別では、10月に成人看護学臨地実習(急性期)を体験した学生では39項目、11月に体験した学生では12項目、12月に体験した学生では22項目において、2001年度と2003年度の自己評価得点に差があった。

考 察

1. 課題学習について

学生が決定した課題学習のテーマは、1人の患者のケアを更に深めていこうとする内容と、2人めの患者を追加して受け持つ中で、新たな体験を増やしていこうとするものに大別できた。前者は、受け持ち患者の術後の経過において、何らかの問題が生じており、その対応に困っ

表7 後期に成人看護学臨地実習(急性期)を体験した学生において、2001年度と2003年度の自己評価得点の母平均の差の検定を行ったときに有意差のあった項目の一覧

番号	評価項目	開始前			中期			終了時		
		10月	11月	12月	10月 ^(注)	11月	12月	10月	11月	12月
1	患者に関心を持ちながら接する								*	*
2	患者の訴えや意見を傾聴す							*	*	*
3	患者の気持ち(情緒・感情・思い)を考える							*	*	*
4	患者の言動をありのままに受け止める							*		*
5	患者の個性(その人らしさ)を尊重する						*	*		
6	患者の価値観や信念・社会的背景を理解する			*						*
7	患者が苦痛に感じていることは何かを考えながら接する							*		*
8	患者が看護者に求めていることは何かを考えながら接する							*		*
9	患者の反応から自分の関わり方を振り返る									
10	患者も自分も成長し、変化する存在であると感じる		*					*		
11	看護者の立場から患者のために何が出来るかを考える								*	*
12	言語的コミュニケーションを用いる							*		
13	非言語的コミュニケーションを用いる			*		*		*		
14	対象の発達段階に応じたコミュニケーションをはかる							*		
15	患者との信頼関係を深めようとする							*		
16	基礎的知識を活用して看護を行う							*		
17	文献を活用して、看護を創意、工夫する									
18	主観的・客観的側面から情報収集する									
19	患者の健康障害・発達課題・生活への影響等について情報収集する									
20	収集した情報を分類し解釈・分析する							*		
21	看護上の問題(看護診断)を明確にする							*		
22	看護上の問題(看護診断)の優先度を考える							*		
23	看護目標を設定する							*	*	
24	看護上の問題(看護診断)に即して、解決策(看護介入)を立案する									
25	看護計画に基づいて実施できる							*	*	*
26	看護技術は、原理・原則に基づいて(基本的留意事項を守って)行う								*	
27	看護技術は、患者の個性(患者の状態)に応じて工夫する							*		*
28	患者の状態や反応に応じて、立案した解決策や優先度を修正・変更して実施する							*		*
29	実施した結果を評価する							*	*	*
30	評価に基づき、看護計画を修正する									*
31	看護記録を他のメンバーにもわかるように記載する									
32	実施した看護と患者の反応を看護師(指導者)に報告する							*		*
33	対象の特殊性(発達段階・健康レベル・系統別)に応じて看護を行う					*		*		*
34	実習で体験したことを看護理論と照らして考えることができる									*
35	患者に必要な看護を継続して行う							*		*
36	学生が行った看護のうち、継続する必要がある看護は看護師に伝える									*
37	看護チームにおいて、学生としての自己の役割を果たす									*
38	医療チームと協調して患者への援助を行う									
39	学生(将来の医療従事者)として責任ある行動をとる							*		*
40	礼儀正しく節度を守って実習する							*		*
41	誠実な態度で患者を中心に考えて看護をする									

(次頁に続く)

番号	評価項目	開始前			中期			終了時		
		10月	11月	12月	10月 ^(注)	11月	12月	10月	11月	12月
42	指導者の助言やコメントを参考にしながら、自己を見直す							*		
43	自己の課題を自覚し、主体的に学習する							*		
44	自己の行った看護を評価し、看護の質を高める							*		
45	看護とは何かを考え研究的態度（文献活用・事例検討）で実習する							*		*
46	科学的根拠（裏付け）を調べて看護する								*	
47	カンファレンスでは他者の意見を傾聴する							*	*	
48	カンファレンスでは自己の意見を述べる							*		
49	グループメンバーと相互に意見交換する							*		
50	グループメンバーと学習を共有する							*		
51	グループメンバーと励まし助けあって実習する							*		
52	実習をとおして看護する喜びを感じる		*							
53	実習をとおして患者の闘病姿勢や生きる努力に感動する									
54	患者や家族と学生の看護に対する考え方の違いを受け止め看護の在り方を振り返る							*	*	
55	実習をとおして看護の役割を自覚する							*		
56	実習をとおして自己の人間観を深める							*		
57	実習をとおして自己の健康観を深める							*		
58	実習をとおして自己の死生観を深める							*	*	*
59	実習をとおして自己の看護観（看護に対する考え方）を深める					*		*	*	*
60	実習をとおして看護のやりがいを感じる		*							
61	実習をとおして看護をさらに深めたいという気持ちや姿勢をもつ									
62	実習をとおして看護師になりたいと思うようになる							*		

* $p < 0.05$

10月^(注)； 10月に成人看護学臨地実習（急性期）を体験した学生のうち、中期に質問紙調査に承諾が得られた人数が2001年度13人であったが、2003年度が2人と明らかに対象者数が少なかったため、検定結果に信頼性が得られないので、除外した

ていたり、更に新たに患者を受け持つことに対して、学生の学習の整理が追いついていないことが考えられる。後者では、多くの学生は自分が学んでみたいと考える課題が病棟実習で実現できるかどうか、意欲的に情報を収集している。どちらの場合においても、学生は課題があることを意識しながら、自分のおかれている状況、学習の進展状況に即しながら自主的に考え、決断して行動をおこしていると考えられる。それは、自己の状況を客観的に振り返ることもつながっている。ある学生は、「（術後から受け持った患者から）術前の不安について語ってもらっていたので、（新しい患者の術前を）想像していたけれど、実際に手術当日の朝の場面に立ち会って、その緊張がものすごくわかった」と述べていた。学生は、成人看護学臨地実習（急性期）の3週間の中の折り返し地点で、自分の学習の進捗状況を目的・目標に沿って振り返る機会を持つことができている。学生は自分が体験できたこと、できなかったことをきちんと整理し、意識的

に課題学習の中で体験できるようになっている。成人看護学臨地実習（急性期）での実習目的や目標を補完する内容が3分の1以上を閉めていたことから判断できる。

2. 自己評価得点について

中期から終了時にかけての自己評価得点が有意に上昇した項目数は、2001年度も2003年度も同じであったが、終了時の自己評価得点は課題学習を導入した2003年度の方が高い。また、終了時の各自己評価項目の平均点も、2003年度が有意に高い。2003年度では、実習中期以降においても、意欲的に実習に取り組むことができていることが推測される。その要因のひとつとして、学生の主体性を重視した学習方法を取り入れたことが影響したと考える。

2003年度の中期から終了時にかけて統計学的に有意に上昇した項目は、コミュニケーション手段を用いて、患者との関係を深め、患者の置かれている状況を詳しく知

り、看護ケアを提供できるように看護チームの一員として現場のスタッフと連携して努力しようとする内容である。前回の調査²⁾では学生は、自らのコミュニケーション技術を低く自己評価していた。コミュニケーション技術の不足は、情報収集の欠如に結びつく。このことから、学生は、意欲的に患者に対して、関係を持つとすることで、人間関係が成立でき、患者の気持ちを引き出すことができたと考えられる。大津ら⁸⁾の調査では、「実習は看護師の手伝いである」と考える学生が85%あったように、ともすれば、受け身的な学習になる可能性が臨地実習には潜んでいる。そのため、いかにして自立的な動機づけ³⁾を学生に対して行うか、臨地実習に関わる教員の力量が問われる。今回、興味・関心の高いテーマを課題学習として取り上げた意義は、学生に自律的に実習に望む動機を与えたことである。それにより、学生は臨地実習の振り返りを行い、自分の行ったことを評価し、コミュニケーション技術を用いて、患者との関係を深めることができた。そして、患者の状況に即した看護ケアを提供できるように現場のスタッフと連携しようとする努力することができたと考える。2003年度終了時の自己評価で4.0点以上の項目が62項目中40項目と多かったことは、自己の学びを高く評価し、学生は達成感を得ていたと推測される。

なお、学生が低く自己評価していた項目は、これまで学んだ知識を振り返り、発展させるために文献を活用し、理論との照合を行うことに関する内容である。これらは、前回の調査²⁾でも、同様に低得点であり、学生は難易度が高いと認識している。これは調査対象とした3年制課程での教育内容の影響が考えられるとともに、短大で行う教育の限界を示しているともいえる。

以上のことから、成人看護学臨地実習（急性期）に興味・関心のあるテーマを課題学習として導入することにより、学生の自発性を高め、臨地実習での学習内容に対する学生の到達度の認識を高める可能性があると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究は、1施設の1実習領域での調査であり、一般化には限界がある。

今後、対象者数を増やして検討を続けるとともに、臨地実習での学びを効果的なものとするために、学生が学んだ内容の質について、客観的な検討を行う必要がある

と考える。

結 論

臨地実習での学びを効果的にするために、成人看護学臨地実習（急性期）では、2003年度後期に学生の興味・関心のあるテーマを課題学習として導入することを試みた。課題学習を導入した2003年度後期（36人）と導入しなかった2001年度後期（34人）の自己評価得点の差を統計的に検定することにより、課題学習の効果を検討した。その結果、以下の結果が得られた。

- ① 課題学習のテーマを決定する過程において、学生は、自己の学習状況を振り返り、整理することができた。
- ② 終了時の自己評価では、課題学習を導入しなかった2001年度では4.0点以上の高得点の項目が20項目であったのに対し、課題学習を導入した2003年度では40項目もあり、学習内容に到達したと高く評価していた。

これらのことより、興味・関心のあるテーマを課題学習として導入することは、学生の自発性を高め、学習内容に対する学生の到達度の認識を高める可能性があると考えられた。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、調査に協力していただきました学生のみならず感謝致します。また、統計学のご助言をいただきました徳島大学医学部保健学科放射線技術科学専攻近藤正先生にお礼申し上げます。

本研究の一部は第14回日本看護学教育学会学術集会（於：山形市）において発表した。

文 献

- 1) 国立大学医療技術短期大学部看護学科協議会臨地実習委員会 A グループ（森田敏子他）：臨地実習固有の学習内容に関する学生の到達度評価、臨地実習教育の改善に関する検討、1-9、1997。
- 2) 桑村由美、田村綾子、市原多香子 他：臨地実習における学習内容に対する学生の到達度の認識—臨地実習開始前、中、後における自己評価の変化の分析

- から－, *Journal of Nursing Investigation*, 2 (1), 7-15, 2004.
- 3) 速水俊彦：自己形成の心理－自律的動機づけ, 9, 金子書房, 2002.
- 4) 服部素子, 能川ケイ, 西浦郁絵 他：訪問看護ステーション実習における学習効果－新カリキュラムでの実習目標の到達状況－, *神戸市看護大学短期大学部紀要*, 23, 47-54, 2004.
- 5) 間瀬由記, 墨由香里, 小柳陽子 他：学生の自己評価からみた成人看護実習到達目標の検討－内科系実習に焦点を合わせて－, *看護展望*, 28(12), 1390-1395, 2003.
- 6) 石原和子, 松本麻里, 岡田純也 他：内科治療領域における臨地実習の展開と学生による自己評価, *長崎大学医学部保健学科紀要*, 14(2), 107-114, 2001.
- 7) 酒井昌子, 長江弘子, 錦戸典子 他：地域看護実習における実習展開方法の検討－学生と保健婦による実習目標達成度評価の分析から－ *聖路加看護大学紀要*, 28, 62-70, 2002.
- 8) 大津真希枝, 倉ヶ市絵美佳, 山本容子 他：隣地実習における看護学生の自己評価と看護師による学生評価, *京都府立医科大学看護学科紀要*, 12, 65-71, 2002.

Self-evaluation study of nursing students' recognitions of their achievement degrees for educational goals in the clinical practices : effectiveness of setting the assignments of students' interesting themes

*Yumi Kuwamura, Takako Ichihara, Takako Minagawa,
Ayako Tamura, Tadaoki Morimoto, and Hiroko Kondo*

Major in Nursing, School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima, Japan

Abstract Objective : The purpose of this study was to assess the nursing students' recognitions of their achievement degrees for their educational goals in the clinical practices and discuss the effect of setting students the assignments of themes in which they had interested in the clinical practices.

Methods : We used the self-evaluation questionnaire (62 questions). Self-evaluation was performed three times ; the first was before the clinical practice, at the middle point of the clinical practice and after the clinical practice. And we set the students assignments in which they had interested in the clinical practices at the middle point in 2003. And we didn't set them in 2001. Then we compared 2003 with 2001, and we tested for equality between two means ($p < 0.05$).

Results :

- 1 . The students assessed their clinical practices when they decided their own themes of assignments.
- 2 . In the final evaluation, the students recognized they achieved their educational goals in 40 items in 2003, though there were only 20 items in 2001.

Conclusion : These results suggest that it may be effective to set the students assignments of themes in which they had interested and that their arrival degrees may be raised by these programs.

Key words : clinical practice, self-evaluation, interesting themes, nursing students